

はじめに

平成25年度は、前任の太田恵雄氏（現 上越教育大学理事、事務局長）が当青少年交流の家所長としての集大成となる業務運営、事業が展開されています。当然ながら、東日本大震災からの復興を忘れてはなりません。文部科学省、国立青少年教育振興機全体においても、被災地域の皆様、特に、子供の心のケアを含む事業を実施していますが、当交流の家においては、太田前所長のリーダーシップの元、全職員が一丸となり、企画段階から綿密に関係機関と連携を取りつつ成果を上げたと窺えます。

是非、当交流の家が主体となって実施した、「福島こどもカププロジェクト ふみだす探検隊 in 岩手山」、「kids together えいごdeキャンプ in テンパーク」、「リフレッシュキャンプ《ウィンター》～親子で楽しむ 自然体験 IN 冬のテンパーク」の事業報告について御一読していただき、御批判くださるようお願いします。

また、当交流の家の看板事業と位置付けた「タートルズキャンプ～自立支援が必要な子供たちのチャレンジキャンプ」は、4年目を迎え着実に成果を上げてきました。今後さらに公立施設などが無理なく同様の事業を実施できるよう、プログラム開発と実践的な研究に取り組みます。

平成25年度の総利用者数は、117,151人であり、震災の前年度（21年度）の113,042人を上回りましたが、このことは被災地域にある青少年教育施設の使命を自ら問い直すきっかけとなるものでした。あの日から3年以上が過ぎ、被災地での子供たちの教育についての報道も少なくなっているのではないかと感じていますが、常に、復興のことを考え、次年度の事業計画、各事業開催要項などを決定し、確実に実施していかなければなりません。

私は、3月まで北海道美瑛町にある国立大雪青少年交流の家に勤務していましたが、一昨年、昨年と「体験の風をおこそう」運動の象徴である幟旗の設置を北海道179全市町村にお願いしてまいりました。「子供のころの体験は、豊かな人生の基盤になります！」を合言葉に、ここ東北の地においても「体験の風をおこそう」運動を推進したいと考えております。

平成26年度は、「安全と健康、そして復興～地域社会（学校・企業・民間団体等）との連携＝日本で最も元気な交流の家」をスローガンに当交流の家を運営します。

どうぞ一層の御支援、御鞭撻の程よろしく申し上げます。

平成26年6月

独立行政法人国立青少年教育振興機構

国立岩手山青少年交流の家所長

三 上 智